男性医師の働き方の「今」に迫る

男の本音座談会

Heart-to-Heart talk with Male Doctors

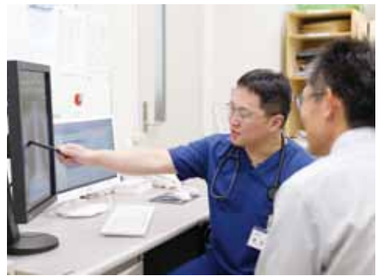
どんな職業に就いていても、昨今叫ばれている「働き方改革」。
そして、度重なる自然災害や環境変化に伴って、「地方移住」という道を選ぶ人も増えているようです。
今回集まってもらったのは、年代もキャリアもさまざまな道内在住医師。
外来に当直に研究にと毎日忙しく働く皆さんに、令和の時代の、
そして北海道のリアルな「医師の働き方」について本音を語ってもらいました。

患者さんとの距離の近さが、働きがいに直結する

武田　私が北海道の病院に勤めようと思ったのは、もともと田舎で地域医療に携わりたいという思いがあり、本州と比べると医師が不足している地域の病院がたくさんあると感じたからです。泉里先生は離島に勤務されているんですよね。

泉里　はい。父がこの病院の院長だったというご縁もあり、2011年から奥尻島内唯一の病院で働いています。2歳から小学6年生まで住んでいて、再び戻ってきました。陸続きでなく、患者さんを気軽に搬送できないため、なるべく自分の病院で完結できるように努めています。離島ならではの難しさがあり、その分やりがいも感じています。

武田　なるほど、やはり少し特殊ですね。皆さんも日々感じていると思いますが、私の思う田舎の良さは、同じ患者さんと長く接していると、その家族も含めて人柄や持っている価値観が理解できるので、治療モデルが作りやすくなるということです。医師として働きやすいと感じる点の一つですね。患者さんとの距離が近いので野菜をいただくこともあります（笑）



石田　医療が人々の暮らしに根ざしているんですね。私も、函館以外の地域と積極的に関わりを持っていきたいと考えています。痛みの治療については、エコーを使うことによってできることが増えたので、それを道南のさまざまな地域に還元していきたい。地域の先生方のお手伝いやボランティア医療など、自分にできることがないか模索しています。

泉里　素敵なお考えですね。私も常に向上心を忘れないようにしています。島に1軒しかない病院で働いているからこそ、「自分がこの島の医療水準」という意識で、患者さんの幅広いニーズに応えられるよう勉強の日々です。

オフは自然の中でのびのび。平日も家族との時間を持てる

石田　私は熊本や大阪など、いろいろな街で暮らしてきましたが、北海道は非常に子育てがしやすいです。気軽に自然に触れられますし、どこへ行ってもさほど混んでいません。子ども自身が良い経験をたくさんできる場所であり、親にとっても子どもとの人生を楽しく過ごせる環境だと思います。

泉里　私も同感です。休みの日は専ら子どもと一緒に外で遊んでいます。島なので海に行って釣りをしたり、山に山菜を採りに行ったり。冬は車で2分の距離にあるスキー場に毎日通っています。テレビやゲーム以外の遊びが溢れています。

石田　うちも似たような休日を過ごしていますね。函館には夜景で有名な函館山がありますが、実は複数の登山コースがあって、子どもとの登山に最適なんです。標高が低いのでうちの子は3歳から登れました。自宅から30分～1時間圏内にこういうアウトドアフィールドが広がっているのは、本当に恵まれているなと思います。

武田　うちの子はまだ幼いのでそれほどアクティブに過ごせていませんが、町内に本別公園という大きな公園あって、アスレチックやボート、ゴーカートなどが楽しめます。密にならない広い公園も、このご時世重宝しますよね。

泉里　私は病院と医師住宅が近いので、休日に限らず平日も妻や子どもと多くの時間を過ごせています。当直も宅直が基本です。

武田　うちも病院から徒歩2～3分の住宅に住んでいます。子どもがまだ幼いので手が掛かりますが、休憩時間に家に帰って子どもの面倒を見られるんですよね。第2子出産時には特別休暇を取得して上の子のお世話を担当しました。最近は育休も取得しやすくなっていますし、北海道なら尚、育休後も育児に参加しやすいんじゃないでしょうか。

石田　男性医師でも1カ月以上育休を取得する人が増えてきていますよね。

武田　私の病院は院長が「オンオフをはっきり過ごそう」という方針なので、育児関係だけでなく、学会への参加や単純に休みたいなどの理由で、何かあればいつでも休んでいいと言ってくださっています。お陰で本当に働きやすいです。

泉里　各市町村の育児支援制度は何か利用しましたか？　私の住んでいる島には産婦人科がないので、妊婦健診は島外の病院にかかる必要がありますが、その際の交通費・宿泊費を一部助成してもらえます。

武田　私の住んでいる町でもベビーカーやチャイルドシートなど、ベビー用品の無料レンタルが行われているので、利用させてもらっています。とても助かりますね。

それぞれにとっての北海道移住、地域医療。これから移住を考えている医師の方々へ

泉里　自宅と勤務先がすぐ側にあることで、忙しくても家族と過ごせる時間が容易に持てます。単身赴任を選択する人もいますが、私は家族みんなで住んで、その町らしい暮らしも含めて、仕事もプライベートも両方楽しむことをお勧めします。

石田　私もそう思います。休日に子どもとアウトドアを楽しむことで、創造力が豊かになり、都会にいた時よりも視野が広がったと感じています。実は3年ほど前から、自分が手がけた超音波解剖の動画のYouTube配信を始めました。これが予想以上の反響で、趣味の一つになっています。こんな風に、以前は思いつきもしなかった発想がふと湧いてくることがあるんです。

武田　私は趣味でバイオリンを習っていて、レッスンの日は当直を外してもらっています。プライベートな時間がしっかり確保できると、人生が豊かに感じられますよね。仕事の面では、何か一つ専門医の資格を取って、自分にとって武器となる分野を用意しておくと、地域で活躍しやすいのかなと思います。学生時代や研修中にたくさんの経験をして、医師が求められている町に飛び込んでみてください。

奥尻町国民健康保険病院
泉里 豪俊 先生
Tsuyotoshi Izumisato

“8歳と5歳の二児の父。趣味はスキー。”

北海道札幌市出身。2003年獨協医科大学医学部卒業。埼玉県立がんセンター、獨協医科大学埼玉医療センターを経て、2011年より奥尻町国民健康保険病院副院長として勤務。2022年院長に就任。

専門科目　外科、総合診療

本別町国民健康保険病院
武田 真一 先生
Shinichi Takeda

“2歳と0歳の二児の父。趣味はバイオリン。”

山形県米沢市出身。2002年自治医科大学医学部卒業。山形県内の診療所に9年間勤務した後、家庭医療専門医の免許を取るため北海道へ。2017年より本別町国民健康保険病院医長として勤務。2022年副院長に就任。

専門科目　内科、総合診療

函館おおむら整形外科病院
石田 岳 先生
Takashi Ishida

“10歳と6歳の二児の父。趣味はYouTube配信。”

北海道旭川市出身。2004年信州大学医学部卒業。伊達赤十字病院、熊本赤十字病院、市立札幌病院、曙生会脳神経外科病院、函館脳神経外科病院などを経て、2021年より函館おおむら整形外科病院に勤務。

専門科目　麻酔科